

# シンデレラ

アンドルー・ラング



ナレーターA：むかしむかし、ひとりの男おとこのひとがいました。男おとこのひとはある女おんなのひとと二にかじめのけっこんをしたのですが、その女おんなのひとは、いつもえらそうにして、お高くたかとまっているひとでした。女おんなのひとにしても二にかじめのけっこんでして、前まえの旦那さんとのあいだに、ふたりのむすめをもうけていました。そのむすめたちときたら気きまぐれで、ほんとうに何なにから何なにまで、その女おんなのひとにそっくりでした。同じように男おとこのひとも、前まえのおくさんとのあいだに、おさないむすめがいました。それはそれはだれよりもおもしろいやりがあって、お母かあさんゆずりのやさしい心こころをもった少女しょうじょで、せかいでいちばんうつくしい心こころのもちぬしといってもいいくらいでした。

けっこん式しきがとりおこなわれてまもなく、ママ母はははその本ほん性しょうをあらわしはじめました。かわいらしくて、人ひとがよい、この少女しょうじょがいると、じぶんのむすめがなんともみじめにおもわれるので、ひどくじゃまにおもえました。そこで少女しょうじょを、とびきりみじめなしごとにつかせようとおもいました。お皿さらをじゃぶじゃぶ洗あらわせ、テーブルをごしごしふかせ、じぶんやむすめたちのへやをめいっぱいそうじさせました。へやまでみじめにしようと、せまくてくらい、やねうらべやにおいやってしまいました。ベッドもなく、そこにはわらがどさりとおいてあるだけででした。でもじぶんのむすめたちには、それぞれ、きらきらのきれいなへやにすませ、ベッドも今いまはやりのベッド、おいてあるかがみはあたまからつまさきまでうつせるほどの、それはそれは大おおきなものでした。

かわいそうに、少女しょうじょはがまんするしかありませんでした。たとえお父とうさんにいったところで、いそがしいといって、とりあってくれないからです。きいてくれたとしても、お父とうさんはあの女おんなのひとのいいなりですから、どうにもなりません。

少女しょうじょはしごとがおわると、いつもかまどのあるこべやへ行いきました。そこはもえがらと灰はいでいっぱいで、いつもその中なかですわっていました。そのためみんな少女しょうじょを『灰はいむすめ』とよびましたが、ちょっとべんきょうのできる下したの方ほうの姉あねが、もうすこしきれいな名なまえでよぼうと、『灰はいかぶりひめ』といういみの、『シンデレラ』という名なまえをつけました。

シンデレラは灰だらけで、きたなくみえたかもしれませんが、ほんとうの顔は姉たちより百ばいもりりしかったのです。姉たちがいくらきれいなドレスをきても、かないっありません。

あるとき、王子さまがダンス・パーティをひらくことになりました。お金もちの人や、ゆうめいな人など、いろいろな人がまねかれました。シンデレラのいえの、ふたりの姉も、服がきれいでひときわめ立っていたので、もちろん声がかかりました。ふたりはおおよろこびで、さっそくドレスはどれにしようとか、ペチコートはどんなのにしようとか、あたまに何をかざろうとか、あれこれなやみはじめました。けれども、シンデレラにしてみれば、めんどろなことがひとつふえただけでした。というのも、姉たちのはだぎをアイロンがけしなくちゃならないし、フリルをつけなくちゃいけない、ぜんぶシンデレラのごとなのです。それにひきかえ姉たちは、朝から夜まで、どうおめかしすればいいかしらとしゃべるだけでした。

上の姉がこういうのです。

姉A：「わたしとしては、フランスせいのふちかざりがついた赤いビロードの服がいいかなって思うのよ。」

ナレーターA：いっぽう、下の姉は、

姉B：「わたしは、お気に入りペチコートをきたいんだけどね。でもそれだけじゃダメだから、ゴールドの花つきのお気に入りケープね、あとダイヤモンドのむねかざりね、ねえ、これってふつうは手に入らないものなのよ。」

ナレーターA：というしだいです。

それから、いしょうのあつかいの上手な女性にたのんで、ぴったりあうように、あたまかざりをふたつなおしてもらったり、ド・ラ・ポシェのおじょうさんからは、赤いブラシとつけぼろをもらったりしました。

シンデレラも服えらびによばれ、

姉A&姉B：どんなかっこうがいいかしら、

ナレーターA：とふたりにきかれました。じつは、シンデレラはとてもセンスがよくて、ふたりのきる服をいつもアドバイスしたり、あたまをきれいにかざったりしていたのです。だからふたりの姉は、こぞってシンデレラをよびました。

シンデレラが服をかざっていたときに、ふたりはいいました。

お姉A：「シンデレラ、あなたもダンス・パーティに行きたくなくて？」

ナレーターA：しかしシンデレラは、かなしそうにほほえんで、いいました。

シンデレラ：「ごじょうだんを、お姉さま。わたくしが行くなんて、めっそうもありません。」

ナレーターA：そういうシンデレラに、ふたりはこうかえしました。

お姉B：「『ああ、そのとおりだあね』。だって、シンデレラなんかダンス・パーティにいたら、みんなのわらいものですものね。」

ナレーターA：シンデレラさえやらなければ、ふたりのあたまはへんてこりんになってしまうのに。でもシンデレラはやさしい子だったので、ふたりのあたまをかんぺきにしあげました。

ふたりはうれしさのあまり、二日間なにも食べませんでした。それくらいうれしかったのです。また、からだをほそく、すらりと見せようと、ひもでむりやりしぼろうとして、たくさんひもをちぎってしまいました。そういうことをしたあげく、なんどもなんどもかがみのまえで、じぶんのすがたを見つめるのでした。

ついに、たのしいその日がやってきました。ふたりはおしろへ出かけていきました。シンデレラは、とおざかっていくふたりを、じっと見つめていました。ふたりのすがたが見えなくなってしまったとき、シンデレラはとつぜんかなしくなって、なきくずれてしまいました。

そのとき、シンデレラのうばが、ないているシンデレラを見つけて、

乳母：どうしたの、

ナレーターA：とききました。

シンデレラ：「わたし、わたし、ほんとうは……」

ナレーターA：とシンデレラはそこから先がいえなくなってしまいました。なみだがつぎからつぎへと出てくるばかりで、ことばが出てこないのです。

そんなシンデレラを見ていた、このうば、じつは、ようせいのくに生まれの、まほうつかいだったのです。

乳母：「おまえは、ダンス・パーティに行きたいとおもっている。ちがわないかい？」

ナレーターA：シンデレラは、

シンデレラ：「……はい。」

ナレーターA：とためいきまじりにこたえました。

うばは

乳母：「よろしい。」

ナレーターA：といい、シンデレラにむかって、はなしをつづけました。

乳母：「ほんのすこしのあいだでいいよ、いい子にしてな。そうすれば、なんとかしてやろうじゃないの。」

ナレーターA：それからうばは、シンデレラをへやにつれていき、いいました。

乳母：「にわに出てって、カボチャをもってきておくんな。」

ナレーターA：シンデレラはすぐに、はたけのなかでいちばんおおきなカボチャをもぎって、うばのもとへもってきました。でもシンデレラは、このカボチャのどこをどうして、ダンス・パーティに行けるようになるのか、まったくおもいもつきませんでした。

うばはカボチャのなかみをぜんぶほじくりかえして、かたいそとがわだけにしました。そのあと、みじかいステッキでちよんとたたくと、カボチャはたちまち、大きくてりっぱなばしゃにかわってしまいました。金色で、きらきらかがやく、よつつのしゃりんがついたばしゃでした。

それから、うばは、ねずみとりのあるところへ行って、なかをのぞきました。ハツカネズミがろっぴき、生きたまま引っかかっていた。シンデレラは、うばにいわれたので、ねずみとりの入り口をちょっとだけあけました。するとハツカネズミがびよんびよんといっぴきずつ出てきて、うばはネズミがびよんと出てはステッキでたたき、びよんと出てはたたきをくりかえし、あっというまに、ろっぴきのハツカネズミは、ろくとうのウマにかわってしまいました。そこにいるのは、ハツカネズミみたいな、きれいな灰色のぶちがついた、りっぱなウマのいちだんだったのです。ただ、うんてんしゅがないので、ウマたちはおちつかない、といったかんじでした。

シンデレラはぴんときて、うばにいいました。

シンデレラ：「ということは、ぎょしゃがひつようなのでしょうか？ わたし、こんどはドブネズミのわなのところへ行って、ひっかかかっていないか見てきますわ。」

ナレーターA：うばはシンデレラにこういいました。

乳母：「ああ、そのとおりだあね。行って、しっかり見てくるんだよ。」

ナレーターA：シンデレラがわなをうばのところにもってくと、<sup>なか</sup>中にはふとったドブネズミがさ  
んびきました。うばは、さんびきの<sup>なか</sup>中から、ヒゲがいちばんながいっぴきをえらび、ようせい  
のステッキでたたきました。すると、ドブネズミはたちまち、あかるい、でぶっちょのぎょしゃに  
かわってしまいました。こうていのヒゲをたくわえて、そのえらそうなことといたら、だれにも  
くらべようがありません。

つぎに、うばはシンデレラにこういいました。

乳母：「もういちど、にわへ<sup>い</sup>行っておくんな。ジョウロの<sup>い</sup>かげに、トカゲがろっぴきいるから、そ  
れをつかまえてくるんだよ。」

ナレーターA：シンデレラはすぐにつかまえてきました。うばは、トカゲたちをろくにんのめしつ  
かいかえてしまいました。ろくにんのめしつかいは、ばしゃのうしろにいそいでとびのりしました。  
めしつかいは、<sup>きん</sup>金や<sup>ぎん</sup>銀でかざりたてたおしきせにみをつつみ、ずっとそればかりやって、もうなれ  
っこだといたいのかのように、ばしゃのうしろにぴったりしがみついていた。

うばは、いちだんらくをつけて、シンデレラにいいました。

乳母：「ほおら、もうここには、ダンス・パーティに<sup>い</sup>行くにはじゅうぶんな、ばしゃもおともも、  
そろったよ。ん、うれしくないのかい？」

シンデレラはぼかんとしていましたが、

シンデレラ：「あ……は、はい！」

ナレーターA：といいますと、あることに<sup>き</sup>気がつきました。

シンデレラ：「あの、でも、わたし、こんなきたないぼろでは、<sup>い</sup>行けない……」

ナレーターA：そこで、うばはステッキでシンデレラの<sup>ふく</sup>服をたたきました。するとどうでしょう、  
みるみるうちに、シンデレラの<sup>ふく</sup>服は<sup>きん</sup>金や<sup>ぎん</sup>銀、ほうせきなどをちりばめた、りっぱなドレスにかわっ  
てしまいました。そして、うばは、いっそくの<sup>ちい</sup>小さなガラスのくつをシンデレラにあたえました。  
せかいのどんなものよりかわいらしい、すてきなくつでした。

こうして、シンデレラはすっかりおめかしして、ばしゃにのりこみました。けれども、うばはさ  
いごに、シンデレラにあるちゅういをしました。

乳母：ダンス・パーティをたのしむのはいいけど、よなかの<sup>じゅう</sup>十二じをこえてはいけないよ。もしち  
よっとでもすぎたら、ばしゃはカボチャに、ウマはハツカネズミに、ぎょしゃはドブネズミに、め  
しつかいはトカゲに、ドレスはぼろに、みんなみんなもともどってしまうよ、

ナレーターA：と。

シンデレラはうばに、

シンデレラ：十二<sup>じゅうに</sup>じまでにはダンス・パーティからかえってきます、

ナレーターA：とやくそくしました。それから、すぐさま、ばしやははしりだしました。シンデレラは、わきあがってくるよろこびを、かくしきれないでいました。

\* \* \*

ナレーターB：王子<sup>おうじ</sup>さまは、だれもしらない、すてきなおひめさまがやって来た<sup>き</sup>ときいて、おむかえしようと、さっ<sup>て</sup>と出てきました。シンデレラがばしやからおりと、王子<sup>おうじ</sup>さまが手<sup>て</sup>を取<sup>と</sup>って、ダンス・パーティのかいじょうへ、あんないしてくれました。すると、かいじょうはしいんとしずまりかえって、みんなおどるのも、ヴァイオリンをひくのもわすれて、あたらしくやってきた、見<sup>み</sup>知らぬ、ぜっせいのびじんをまえに、じい<sup>み</sup>と見つめることしかできませんでした。しばらくすると、ざわざわとみんなはさわぎだしました。

貴族<sup>きぞく</sup>A：「おい、あのひと、たいへんなびじんだぞ。」

貴族<sup>きぞく</sup>B：「ねえ、あのひと、たいへんなびじんじゃないかしら。」

ナレーターB：王<sup>おう</sup>さまは、もうお年<sup>とし</sup>でしたが、それでもシンデレラのうつくしさには、びっくりしてしまいました。そして、となりにいるおきさきさまに、

王<sup>おう</sup>さま：むかし、おまえをみたときも、あの少女<sup>しょうじょ</sup>のように、うつくしかったんだよ、

ナレーターB：とあまくささやかずにはいられませんでした。

かいじょうにいた女<sup>おんな</sup>のひとはみんな、シンデレラの服<sup>ふく</sup>やあたまかざりが、あまりにすばらしいので、つぎの白<sup>ひ</sup>にまねしてこようと、じつと見つめました。でも、それには、うばがあたえてくれたような、すばらしいそざいと、シンデレラのような、みごとなうでまえがみつようなのですけどね。

王子<sup>おうじ</sup>さまは、シンデレラを、パーティのしゅやくがすわるせきに、つれていきました。そして、

王子<sup>おうじ</sup>さま：いっしょにダンスをしましょう、

ナレーターB：とフロアに手をひいていきました。みんながうっとりするほど、シンデレラのダンスはじょうずでした。おいしそうなおかしが出されたときも、王子さまはひと口もたべず、ずっとシンデレラの顔をみつめていました。

シンデレラは姉たちのそばに行行ってすわり、たいへんていねいにあいさつをして、王子さまからもらった、オレンジやシトロンをわけてあげました。ふたりの姉はシンデレラだときづかず、とてもびっくりしていました。

シンデレラがこうして、ふたりの姉をたのしませているうちに、十一じ四十五ふんのかねがなりました。シンデレラはあわてて、みんなにおわかれのあいさつをしてから、いちもくさんに、かいじょうをあとにしました。

いえにかえると、シンデレラはいそいで、うばをさがしました。そして、おれいをいいました。あともうひとつ、シンデレラにはいわなきやならないことがありました。あしたも、ダンス・パーティに行きたい、ということです。というのも、王子さまが、

王子さま：あしたもぜひきてください、

ナレーターB：とってくれたからです。

シンデレラがダンス・パーティのことを、うばにうれしそうにはなしていたとき、ちょうどふたりの姉がげんかんのドアをノックしました。シンデレラははしって行って、ドアをあけました。

シンデレラ：「おそいおかえりでございますね。」

ナレーターB：と目をこすって、のびをしながら、あくびまじりに、シンデレラはいいました。だれが見ても、いまおきたばかりにしか見えませんでした。でも、姉たちがでかけてから、シンデレラはいちどもねむいとおもったことはないのですけれど。

下の姉がいました。

姉B：「もし、あなたがダンス・パーティにいたならば、いつきもたいくつすることはなかったでしょう！ ……なんてね。だって、きれいなおひめさまが、とつぜんあらわれたのよ。もう、みたことないくらい、びじんなの。すごくれいぎただしくて、わたしたちにオレンジとかシトロンとかくれたの。」

ナレーターB：シンデレラは、おもしろくないふりをしました。でもいちおう、

シンデレラ：おひめさまの名まえってなんていうの、

ナレーターB：とききました。ふたりの姉は、

姉B：名まえは知らないけど、王子さまは、そのおひめさまにどきどきしていたわ、

ナレーターB：といいました。

姉A：王子さまなら、名まえを知るために、このくにだってあたえかねないわ、

ナレーターB：と。このときばかりは、シンデレラもほほえみました。

それから、こういいました。

シンデレラ：「とてもきれいな、おひめさまでしたのね。うらやましいかぎりですわ。わたしも、そのおひめさまがみたくなってきましたわ。ねえ、シャルロットお姉さま、お姉さまのいつもきている、あのきいろい服、かしてくださいませんか？」

ナレーターB：それにたいして、上の姉のシャルロットは、かんだかい声でいいました。

姉A「まあ、そうくるとおもったわ。あなたのような、うすぎたない灰むすめに、わたしの服をかせですって！ ばかにしてるわ！」

ナレーターB：シンデレラも、そういうへんじがくるとおもっていました。ぎゃくに、そういわれてうれしかったくらいです。だって、もし姉たちがおあそびで服をくれようものなら、シンデレラはみじめなきぶんでパーティに行くことになったからです。

よくじつ、姉たちはダンス・パーティへ行きました。シンデレラも行きました。きのうのパーティのときより、もっとおめかししていきました。王子さまはずっとシンデレラのそばにいて、いつもやさしいことばをささやいてくれました。あまりにもたのしかったものですから、シンデレラはじかんのことなんて、すっかりわすれていました。いまは、十一じくらいかな、とぼんやりおもっていたのです。

するとどうでしょう、十二じのかねがなっているではありませんか。シンデレラはびっくりしてとびあがり、ウサギのようにそそくさとにげださなくてはなりませんでした。王子さまはいっしょうけんめいおかけましたが、シンデレラはもう行ってしまったあとでした。けれど、シンデレラのガラスのくつが、かたほうのこっていました。王子さまはそうろっと、くつをひろいあげました。

シンデレラはいきをきらしながら、なんとかいえへかえれました。服はすっかりもとのぼろにもどっていて、きれいだったあれやこれやは、なにもありません。ただ、おしろでおとした、ガラスのくつのもういっぽうだけが、のこっていました。

そのすぐあと、おしろのものばんが、



王子さま：だれかおひめさまがぬけださなかったか

ナレーターB：、ときかれました。するともんぱんのひとりが、

門番：わかいむすめがひとり、でていった

ナレーターB：とこたえました。

門番：けれども、ぼろをきていて、おひめさまというより、まずしいなかのむすめ、というかんじだった、

ナレーターB：と。

やがて、ふたりの姉もパーティからかえってきました。シンデレラは、

シンデレラ：たのしかったですか、またあのすてきなおひめさまはいましたか、

ナレーターB：とききました。

ふたりは、

姉A&姉B：ええいましたわ、

ナレーターB：とこたえました。

姉A：でも、十二じのかねがなったとき、あわててとびだして行って、あわてすぎて、ガラスのくつをおとしていったのよ、

ナレーターB：と。

姉B：とってもかわいくつで、王子さまがひろったの。だって、パーティのあいだじゅう、ずっと、そのおひめさまのことばかり見ていたんですから、あたりまえのことだけど、

ナレーターB：とつづけました。

そしてさいごに、

姉B：王子さまは、そのガラスのくつのおひめさまに、ひとめぼれしたにちがいないわ、

ナレーターB：とつけくわえました。

ふたりのいったことは、まったくそのとおりでした。なんにちかたつた日のこと、トランペットがなって、王子さまのことで、おふれがあるといったのです。なんと、そのひろったガラスのくつが、ぴったり足に入る女のひとを、王子さまのはなよめにする、というではありませんか。

王子さまにいわれたおやくにんは、いろんなおひめさまに、そのくつをはいてもらいました。それからいろんなひとのおくさんや、おしろにいるむすめたちにもはいてもらいましたが、ぴったり入るひとは、だれもいませんでした。

くつはまわりまわって、シンデレラのいえにもやってきました。姉たちはなんとかしてくつに足をおしこもうとしましたが、どうにもこうにもなりませんでした。シンデレラはよこで見ていて、ガラスのくつが、うばからもらったあのくつだということに気がつきました。そこで、わらいながらいいました。

シンデレラ：「わたしにも、あわないかどうかだけ、たしかめても？」

ふたりの姉はぶっとふきだして、シンデレラをからかいました。でも、くつのもちぬしをさがしているおやくにんは、シンデレラをじっと見つめました。おやくにんは、シンデレラがとてもしい顔をしていると、気づいたのです。

そこでおやくにんは、こういいました。

お役人：はいてごらんなさい、だれにもためしてみよ、といわれておりますので、

ナレーターB：と。

おやくにんは、シンデレラをイスにすわらせ、足にくつをあてがうと、するりと入ってしまいました。まるですべすべにみがいたみたいに、シンデレラの足に、ぴったり入ったのです。

ふたりの姉は、びっくりして、なにもことばが出てきませんでした。でも、つぎのしゅんかん、もっとびっくりしました。シンデレラが、ポケットからもうかたほうのガラスのくつをとりだして、じぶんの足にはめたからです。

そこへうばがやってきて、シンデレラのぼろをステッキでちょんとたたきました。シンデレラの服は、みるみるうちに、まえよりもっときれいな服にかわってしまいました。

さすがにふたりも、ダンス・パーティで見たきれいなおひめさまが、シンデレラだったことに気がつきました。ふたりはシンデレラのまえにひざまづいて、

姉A：いままでひどいことをたくさんしましたが、

姉A & 姉B：どうかゆるしてください、

ナレーターB：とおねがいしました。

けれども、シンデレラはふたりの顔をあげさせて、ぎゅっとだきしめました。

そして、こういいました。

シンデレラ：「いいんです、ほんとうに、いいんです。ただ、わたしをいつも好きでいてくれたら、それだけでいいんです。」

ナレーターB：シンデレラはそのすがたのまま、王子さまのまえへあんないされました。王子さまは、今日のシンデレラが、今までの中でいちばんうつくしい、と思いました。

すうじつご、シンデレラと王子さまはけっこん式をあげました。こころやさしいシンデレラのとりはからいで、ふたりの姉も、おしろでくらせるようになり、シンデレラのけっこんしきとおなじ日に、姉たちもおしろのえらいひとと、けっこんしましたとき。

---

翻訳の底本：Lang, Andrew (1889) "Cinderella, or the Little Glass Slipper"

上記の翻訳底本は、著作権が失効しています。

2002（平成14）年4月1日初訳

2006（平成18）年4月30日修正

※この翻訳は「クリエイティブ・コモンズ 表示 2.1 日本 ライセンス」

（<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>）によって公開されています。

Creative Commons License

翻訳者：大久保ゆう

2014年3月25日作成

青空文庫収録ファイル：

このファイルは、著作権者自らの意思により、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）に収録されています。

\* 訳者に確認の上、一部表記を改めています。